

サロメの系譜 聖書の時代から現代まで

齊藤 恵子

はじめに

本稿は、1998年に、共立女子大学文芸学部の総合講座「社会と女性」で、「サロメの系譜」と題して行った講義に基づいて、それを大幅に加筆したものである。この「社会と女性」は、その年によって、「家族と結婚」「結婚と女性の生き方」など具体的なアプローチを決めて、七人ほどの専門の異なった教員が担当して約十年続けてきた。1998年には、「女性の生き方を読む」という授業内容にした。「急速に変化し、男女の性別役割も崩れつつある現代、以前のように生き方のモデルを見つけ難くなってきた。多種多様な要素を自分で組み合わせ、自分の生き方を創造していかなければならない。手近にモデルがない時に、まったく違った時代や状況におかれた、他者の経験から学べることも意外に多い。多様な女性の生き方を読み、そこから自分たちの生き方を考えるヒントを得よう」というのがねらいであった。

文学や文化を専攻する教員は、主として神話、伝承、お伽話など、テキストを定めて今日の視点から読み直し、現代的意義を発見したり、再解釈した。

聖書の中の一挿話に端を発して以来、二千年近くさまざまなジャンルでのサロメの姿は実に多彩であり、テキストを一つにも定め難い。そこで私は、サロメの系譜の中から年来の自分の関心に合わせて、三つの側面を取り上げることにした。一つは、サロメの話を実史と虚構の両面から源流にさかのぼり、女性の視点からサロメとその母ヘロディヤを考えてみる。一つは、絵画と文学との相交わる点で、サロメとユディットとの重ね合わせを考える。あと一つは、男性の目から語られることの多かったサロメを、同性の歴史家であり作家が解釈した、「サロメの乳母の話」(塩野七生)に耳を傾けることである。

I - サロメ像の変遷

サロメといえば、十九世紀末のオスカー・ワイルドによる戯曲『サロメ』⁽¹⁾とそれに付けられた、夭折した鬼才オーブリー・ビアズレーの、グロテスクな白黒の挿絵(図-Ⅱ)によって最もよく知られているであろう。ユダヤの分封国守ヘロデ・アンティパスの妃ヘロディヤ



図-I 洗礼者ヨハネの斬首 (サン・ジョヴァンニ洗礼堂南門 フィレンツェ)
講談社 名画への旅20巻より転載



図-II ワイルド『サロメ』のピアズレー挿絵
学習研究社 アール・ヌーヴォーの世界4、
黒の曲線「ピアズレーとロンドン」より転載

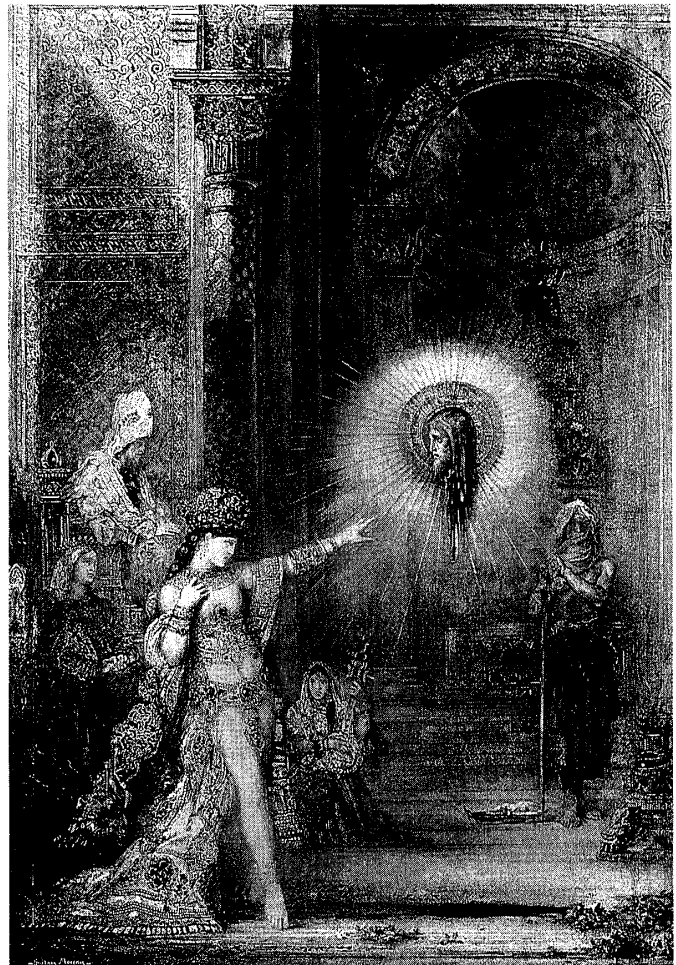


図-III ギュスターヴ・モロー「出現」(ルーヴル美術館 パリ)
講談社 名画への旅20巻より転載

の連れ子であるサロメが、洗礼者ヨハネに恋心を抱き、それを拒否されたため、義父ヘロデの祝宴で舞い、その踊りの褒美として、銀の大皿にのせたヨハネの首を望み、血のしたたる彼の生首を手に入れるが、不安と恐怖をおぼえたヘロデ王の兵士の盾の下で圧死するという話である。ワイルドの『サロメ』は、H.ラハマンによりドイツ語訳され、さらにこれをリヒャルト・シュトラウスが歌劇として作曲した。これが成功して、以後戯曲より歌劇として上演されることが多かった。サロメ物語の源は、しかしながら、聖書の時代にまでさかのぼる。それから二千年の間、サロメは、文学だけではなく、絵画、彫刻、音楽、演劇、舞踏、映画、ポスターなど、数多くのジャンルで取りあげられ、現代に至るまで、飽くことなく描かれてきた。

もともとサロメは、洗礼者ヨハネの殉教の脇役的存在であった。聖書を読めない民衆のために聖人の生涯を絵解きする図が、西洋の寺院の装飾画などによくみられるが、数ある聖人の中でも守護聖人として洗礼者ヨハネは人気が高かった。フィレンツェのサン・ジョヴァンニ洗礼堂もその名の通り守護聖人が洗礼者ヨハネで、その洗礼堂装飾（図一 I 「洗礼者ヨハネの斬首」）にみるごとく、中心の聖ヨハネの右の首斬り役人と同じように、盆を抱えた左のサロメは副次的な人物である。中世までのサロメは主として、しなやかな肢体をもち軽やかに時に曲芸師のように踊る少女であった。ルネッサンス時代になると、布教の手段であった脇役の域を越えて、もっと華やかな宴会で魅惑的に踊り、また生首を捧げもつ美女というように、中心的存在に変わってきた。

サロメは、画家たちの創造意欲、想像力を大いに刺戟するところがあり、バロック美術において、美女と生首のモチーフは、さらに流行をみせた。同じく聖書に典拠をもつユディット、すなわち祖国を救うために敵将の首を斬った旧約聖書外典『ユディット書』⁽²⁾の美しき寡婦とともに、サロメの姿も頻繁に描かれ、時にこの二人は混同されることもあった。サロメの主題は、西洋の画像伝統の中で、さまざまに変容しながら繰り返し描かれてきたのである。

サロメと母ヘロディアも、時として混同されたり、重ね合わされたりしたが、十九世紀になると、フランス文学では、サロメよりも母のヘロディアの方が好まれて、ステファン・マラルメの長詩「エロディヤード」、ギュスターヴ・フローベールの『三つの物語』中の「エロディアス」で中心人物となった。ドイツのハインリヒ・ハイネも、その風刺詩『アッタ・トル』(1847)で、「洗礼者ヨハネの首を所望した／あのヘロデ王の美しい妃」として描いている。

十九世紀の世紀末は、詩人や文学者、彫刻家、画家たちが自分のジャンルに閉じこもらないで交流が盛んな時代であった。世紀末のフランスの作家ユイスマンスの『さかしま』⁽³⁾の主人公デ・ゼッサントは、想像に耽溺し、衰えた健康と衰退感に刺戟を与えるため、奢侈にふけり、現世を放棄し、人工美の極致を求めるのだが、ギュスターヴ・モロー⁽⁴⁾の描くサロメの二枚の絵、「ヘロデの前で踊るサロメ」と「出現」を自室に飾って嘆賞する。デ・ゼッサントが最も魅せられたのが、図一Ⅲの「出現」⁽⁵⁾であった。自分の所望したヨハネの首の幻影の

前に立ちすくむモローのサロメは、無慈悲で破壊的、悪徳の権化である。

ワイルドが『サロメ』は、何よりも、フローベールの「エロディアス」に影響されて書かれたものであるが、ワイルドがこれを書いた時、デ・ゼッサントの愛でてやまぬモローのサロメ像が脳裡にあったとも、パリの友人の家でみた聖ヨハネの首の蠟彫刻に触発されたところ大であったともいわれる。いずれにしても、十九世紀以降のサロメ像は、完全に宗教的な色彩を脱している。

日本へは、明治末期に森鷗外「脚本『サロメ』の略筋」によって紹介され、大正期になると、外国戯曲の翻訳ものが盛んになるにつれて、松井須磨子や水谷八重子によるサロメが演じられるようになった。芥川龍之介、日夏耿之介もサロメに魅せられた文学者の例だが、三島由紀夫はとりわけ、モローと、ビアズレーの挿絵付きワイルド作『サロメ』に魅了され、文学座の「サロメ」を演出した。従来、男性の目から描かれることの多かったサロメを、三島由紀夫の長女平岡紀子が演出して、出演者全員が男性という異色の企画で、東京の青山円形劇場で上演されたことがあった。

三島のサロメ劇と無関係ではないように思われるサロメ像の変貌はつづく。最近、女性作家（だと推察する）の独自の視点から、これまでの伝統的サロメ像を一新させるSF小説に出会った。野阿梓の『少年サロメ』（1998）である。聖書の物語とワイルドの『サロメ』を基盤に、その構成と枠組みを巧みに解体し、さらに伝承的なサロメ解釈の変遷を綿密に検証したうえで、サロメを分封王国の王位継承者である「美少年」として描き直しているのが、このSF小説の最大の特長となっている。

この小説では、二千年の時間を超越した、架空の銀河宇宙帝国の属国である、星の王国アズラエルの美しきサロメ王子と、彼を取り巻く主要登場人物たちの物語に姿を変え、しかもワイルド風な、かつ十九世紀末の香りを漂わせて、舞台演劇の書き割りで、生き生きとした耽美的なSF活劇空間を創り上げている。『少年サロメ』は、サロメ物語のパラダイムを打破しようとする狙いが感じとられ、聖と俗の根拠を問う預言者ヨカナンと少年サロメとの対話場面をはじめ、権力と暴力、役割としての性（ジェンダー）の問題、愛の脆さと永遠性、美と快楽の残虐性、エロティシズムなど、いくつもの現代的な主題へのアプローチの可能性を提起しているように思え、作者のなみなみならない意欲をも読み取ることができる。

II－福音書の中の「ヘロディアの娘」——史実と虚構

ワイルドのサロメは、自らの意志で、舞の褒美にヨカナンの首を求めるが、福音書の中のサロメは、「ヘロディアの娘」とあるだけで名前すら与えられていない。洗礼者ヨハネの首を所望するのも、母ヘロディアの差し金で、サロメは従順にそれに従っただけである。サロメの話の源は、マルコとマタイ二つの福音書の記述である。しかし、どちらの福音書にもヘロディアの娘の名は出てこない。

「サロメ」として後世が記憶している名は、フラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』（全二十巻）に出てくるのである。新約聖書の四福音書は単なる伝記でも歴史書でもなく、「イエス」を救い主キリストであると証言する宣教の文書である。史実を含むが、史実ばかりでもない。フラウィウス・ヨセフスの本名はヨセフ・ベン・マッタティアス（約37-102年頃の人といわれる）で、『ユダヤ古代誌』は、新約聖書時代の第一級の同時代史料といわれる。⁽⁶⁾ ユダヤの祭司階級貴族出身の、この年代記作者は、ガリラヤの総督であったが、66年のユダヤ戦争の時、ローマの将軍に降伏し、その後ローマの庇護の下に著述活動をしたため、民族の裏切者ともいわれた。だが、異民族であるギリシャ人、ローマ人に対して、ユダヤ民族を理解してもらうために、その歴史を語ったもので、福音書時代のユダヤ史を知るのに不可欠の文献とみなされている⁽⁷⁾ ものである。福音書と『ユダヤ古代誌』の二つの資料から、サロメの実像に近づいてみよう。

話の骨子は共通しているが、ヘロデの人物像、ヘロディアの性格などにマルコとマタイには違いがみられる。マルコ福音書は四福音書中、最も古く、成立年代は60年代あるいは70年代前半だといわれている。最も短く、内容が簡潔で文章も素朴である。近代になって最も古い、信頼すべき資料を含むものとして重要視されてきた。マタイ福音書は、マルコ福音書と、Qと呼ばれる資料、および著者が独自で入手した資料とを合わせて、80年代に成立したといわれる。二つを比較しながら検討してみたい。

マルコ六章 14-26⁽⁸⁾

イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。実は、ヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、そのことで人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。ヨハネが、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日の祝いに高官や将校、ガリラヤの有力者などを招いて宴会を催すと、ヘロディアの娘が入ってきて踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言い、さらに、「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。少女が座を外して、母親に、「何を願いましょうか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。早速、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐに

洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくはなかった。そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、盆に載せて持って来て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。

マタイ十四章 1-11

そのころ、領主ヘロデはイエスの評判を聞き、家来たちにこう言った。「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」実はヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアのことでヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。ヨハネが「あの女と結婚することは律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。ヘロデはヨハネを殺そうと思っていたが、民衆を恐れた。人々がヨハネを預言者と思っていたからである。ところが、ヘロデの誕生日にヘロディアの娘が、皆の前で踊り、ヘロデを喜ばせた。それで彼は娘に、「願うものはなんでもやろう」と誓って約束した。すると、娘は母親に唆されて、「洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、この場でください」と言った。王は心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、それを与えるように命じ、人を遣わして、牢の中でヨハネの首をはねさせた。その首は盆に載せて運ばれ、少女に渡り、少女はそれを母親に持って行った。

ここにヘロデ王とあるのは、イエス誕生当時のユダヤの王であり、幼児虐殺を行ったとされるヘロデ大王の息子、ヘロデ・アンティパスとよばれていた王である。「王」というより、「分封国守」「分封領主」のよび方が実態に測している。

ヘロデ大王はエドム人で、ローマの元老院によってユダヤ王となった。親ローマ政策の下にユダヤ圏を拡大してエルサレム神殿の他、建設事業も多く企てたが、猜疑心が強く十人の妻をもち、妻や兄弟、自分の子供までも殺したといわれる残忍な一面をもっていた。

紀元前4年の大王の死後、ユダヤはローマ帝国の直轄属領となり、ローマ帝国から派遣された総督が統治していた。ガリラヤとペレアは分封国家となり、紀元前4年から紀元後39年まで支配したヘロデ・アンティパスは、イエスから「あの狐」⁽⁹⁾（ルカ十三章 31-34）とよばれている。後に十字架につけられる前にユダヤの第5代ローマ総督ポンシオ・ピラトから送られてきたイエスに審問を試み、イエスから黙殺された人物である。イエスを死刑にするほどの罪を認めることができなかつたピラトにしてみれば、このガリラヤ出身の男イエスの決着に自からは関与せず、ヘロデに押しつけてしまう絶好の機会であったのである。結局、ヘロデはイエスをピラトのもとへ送り返したが、これをきっかけに敵対していたヘロデとピラトは「仲がよくなった」。⁽¹⁰⁾

イエスの名が知れ渡った時、ヘロデは、洗礼者ヨハネが生き返ったのかと不安に駆られる。

ヘロデはヨハネの首を斬ったからである。一人の預言者をせっかく亡き者としたのに、すぐその後に同じようなメッセージを伝え、前にもまさる民衆の声望を集めつつある人物が出現したのを知った時、ヘロデは心底強い不安と恐れにおそわれた。ヘロデがヨハネの首を斬った理由は、両福音書とも洗礼者ヨハネが、ヘロデのヘロディヤとの結婚を律法で許されていない、と非難したからであると説明している。

ヘロデは、アラビアのナバテア人の王の娘と結婚していたのだが、ローマを訪れた時、裕福な暮らしをしているヘロデ・フィリポとよばれる兄の妻ヘロディヤに惹かれて、自分の妻を離縁してヘロディヤとの結婚を強行した。ヘロデ、ヘロディヤともに自分の妻、夫を離婚しての話である。ヘロディヤはヘロデ大王の孫娘にあたり、幼い時から一族の骨肉相はむ血なまぐさい悲劇を身近に見聞きして育った。最初の夫は、ヘロデ大王の息子のヘロデ・フィリポで、ヘロディヤ自身の叔父にあたる。地味で政治的な野心に欠けた夫を齒がゆく思っていたらしいが、夫が政治的陰謀に加わったという理由で、勘当のような状態でローマに滞在していたのであった。⁽¹¹⁾

ヘロディヤの最初の結婚そのものが、ヘロデ一族の近親結婚の一例であり、彼女は叔父たちの政略結婚に翻弄されたともみられる。結局、ヘロディヤは夫との間に生まれたサロメを伴って、ヘロデ・アンティパスのもとに走った。⁽¹²⁾ 近親相姦にあたるヘロデのヘロディヤとの結婚は、理由もなしに妻を不法にも離婚したこと、ユダヤ教の律法で禁じている、兄弟の妻と結婚したことにより、律法に背くものなのである。「兄弟の妻を犯してはならない。兄弟を辱めることになるからである」(レビ記十八章 16)「兄弟の妻をめとる者は、汚らわしいことをし、兄弟を辱めたのであり、男も女も子に恵まれることはない」(レビ記二十章 21)に反している、ということになる。当時、個人の生き方の規範は常に、律法に求められていたのである。

洗礼者ヨハネは、ユダヤの由緒正しい祭司の家系の出身で、両親ザカリアとエリザベスは、ユダヤ教の戒律を守る、神の前に正しい人であった。ヨハネは長じて、ユダの荒れ野で、旧約の預言者エリヤと同じように預言活動を開始した。旧約の時代から新約へと橋渡しをする役割をになって登場したのである。マルコとマタイも、ともに洗礼者ヨハネをイエスの先駆者、イエスの到来を準備する人として描いているのだが、マルコが「荒れ野で叫ぶものの声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ』」(マルコ一章 3)と紹介する他には、ヨハネが何を伝えたかをほとんど語っていないのに比較して、マルコより十年か十五年ほど遅れて福音書を書いたマタイは、ユダヤ教からの迫害にさらされて、生まれたばかりのキリスト教会を守る立場で、全体の構想を考えて個々の伝承の配置と記述の仕方を決めて書いており、イエスを、イスラエルの歴史の中で待望されていたメシヤ——旧約の律法の完成者——と位置付け、洗礼者ヨハネの殉教も、イエスのその先駆とはっきり意識して描いている。

権力者を公然と非難するのは、大胆な行為であったが、神の言葉を伝える預言者の使命を

自覚していたヨハネは、恐れず領主ヘロデの結婚を律法を犯すものであると批判した。マルコによると、このことで妻ヘロディヤは徹底的にヨハネを恨み、殺そうとしたができていない、とある。その理由は、夫が「ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながら、なお喜んで耳を傾けていたからである。」ヘロデは妻の殺意を知り、妻の手からヨハネを保護しようと思ったのであろう。ヘロデは、ガリラヤとペレアの領主でもあった。ガリラヤには、洗礼者ヨハネを預言者として信じる熱狂的な民衆が多くいて、ヨハネを奪回して反乱を起こす恐れもあったので、ヘロデは、ヨハネをペレアのマケラオ城に幽閉していた。⁽¹³⁾ またヘロデは、ヨハネの非難に当惑を感じながらも、ヨハネの教えの正当性を知って良心のゆらぎを感じていたらしい。

ここには、優柔不断ではあるが、まったくの悪人ではない権力者ヘロデの姿がうかがわれる。しかしマタイの描くヘロデには、このような人間的な迷いはない。ヘロデ自身がヨハネを殺したいと思ったが、民衆がヨハネを預言者として尊び、その名声が高まるにつれて、もしヨハネを処断すれば、民衆が反乱を起こし、自分の地位がゆらぐことを何よりも恐れて、決断できないでいたのである。この二つのヘロデ像は、福音書記者としてのマルコとマタイの姿勢の違いからくるものであろう。マルコは、イエスにしても、ヘロデ・アンティパスにしても、現実の歴史の中に生きた人間として、具体的にその言動を記述しているのに対して、マタイには護教的な姿勢が際立っている。

マルコは、「ところが、良い機会が訪れた」と書くが、ヘロデにとってではなく、ヘロディヤにとって「良い機会」であった。高官や有力者を招いたヘロデの誕生日の宴席で、ヘロディヤの娘が踊り、それがみなを喜ばせたのである。マタイは「ヘロデを喜ばせた」としか書かないが、マルコのヘロデは、宴席の客が喜んだのに自分も喜び、その褒美に「この国の半分でも」やろうと誓う。分封国主の身で、王国の半分を自由にするなど不可能だったが、宴席の座興として半ば冗談のように出た話であろうし、ヘロデ王の人の好きを表わしてもいる。ところがヘロディヤの娘は、母に相談してヘロデの思いもかけなかったものを願った。「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せていただきとうございます。」マタイは、「娘は母親に唆されて」と、あたかも事前に母娘の取り決めがあったかのように書く。座を外して母親に相談して答をもらうマルコの記述には、臨場感がある。

夫の弱点を見抜いていたヘロディヤは実に巧みに自分の希望を実現し、自分の軽率な約束と、妻の怨恨の板ばさみで苦境に陥ったヘロデは心を痛めた。マタイは「王は心を痛めたが」とだけ書いてすますが、マルコは「王は非常に心を痛めた」⁽¹⁴⁾と書いている。

ヨハネの斬首、舞踏会の宴席で踊りをおどった少女が盆にのせた首を披露する情景、これが後々、絵画、文学、演劇などさまざまな領域で、芸術家たちの表現意欲に、強烈なインパクトとインスピレーションを与えてきた物語の源であるが、これが史実であるかどうか定かではない。「ヘロディヤの娘」は最後まで、二つの福音書で名前を与えられていない。福音書の主役は、優柔不断ながらも、絶対的な権力を握っており、最後はその暴力的な権力を

行使したヘロデ王と、それを巧みに、冷血のうちに利用したヘロディヤである。

サロメの名は、フラウィウス・ヨセフスが書いた『ユダヤ古代誌』の第十八巻に記されているが、そこには、サロメが舞を舞ったことや、その褒美としての洗礼者斬首の記事は一切ない。ヨハネの民衆に及ぼす影響力が騒乱に及ぶのを恐れたヘロデが、反乱に先立って殺害しておくほうが得策だと思った、とある。⁽¹⁵⁾

フラウィウス・ヨセフスによれば、実際のサロメは、むしろ平凡で、母ヘロディヤのような傲慢さや残酷さはなく、人を不幸にひきずりこむこともなく、ワイルドのサロメのように王の兵士の楯で圧殺されることもなく、成人して妻となり、24歳で寡婦となり、その後再婚して、三人の男の子の母となり、劇的な波乱もない一生を終ったとされている。⁽¹⁶⁾ ヨセフスの『古代誌』では、洗礼者ヨハネの死に関しては、ヘロディヤもその娘サロメもきわめて影が薄い。サロメが悪女のイメージで伝わった理由の一つとしては、ヘロデ大王の一族にサロメ一世といわれる残忍な性格の女性があり、その名が、ヘロディヤの娘サロメと混同され、次第に増幅されていったのではないかと考えられる。ヘロデ一族の中には、悪徳や淫行、あらゆる不品行が渦巻いていたとしても不思議はない。因みに「サロメ」という名は、ヘブライ語のシャロームShalomから由来しており、平和を意味する。

III－ヘロディヤの言い分——律法と女性

ハイネの『アッタ・トロル』は、「夏の夜の夢」という副題をもち、アッタ・トロルという名の熊が、当代の俗っぽい文学者や愛国者を痛烈に攻撃した長編詩だが、妖婆の家で一夜を明かしたアッタ・トロルが窓の外を通る不思議な行列を見る場面がある。通り過ぎるのは神話や伝説中の人物なのだが、その中に三人の美しい女性がいる。ギリシャ神話の女神ディアナ、アブンダとよばれる妖精も姿をみせるが、最も目を惹くのは、ヘロデ王の美しい后である。

血の責を負い

この女王もまた呪いを受けたのだ。

それで幽霊となって最後の審判の日まで

狩猟の一行に加わり走らねばならぬ。

両手には、いつまでも

ヨハネの首を載せた皿を持ち

そして、それに接吻する。

まったく熱情的にその首に接吻する。

むかしヨハネを恋していたからだ——
聖書にそのことは書かれていない、
が、民間にはヘロディアの
血なまぐさい恋の伝説は生きている——

そうでなければ、この女王の
情欲は説明されない——
恋してもいない男の首なんぞ
所望する女があるのだろうか？

ふとしたことで恋しい男を憤り
その首をはねさせたに違いない。
だが皿に載る
恋人の首を見るや、

ヘロディアは泣いて気がふれ
そして恋に狂って死んだのだ。
……

夜になると生きかえって
血のしたたる首を手にして
猟に出かけるという噂——
しかも狂った女の気まぐれから

この詩ではヘロディアとサロメはまったく同一視され、ヨハネに恋慕し、はねさせた首に狂おしく接吻するヘロデ王の後ヘロディアという姿が、民間伝承として根付いていることがわかる。マラルメの「エロディヤード」（ヘロディアのフランス語読み）は、ギリシャ神話の純潔の女神ディアーナを思わせる「石胎」「純潔」「不毛」の姫としてうたわれている。

フローベールは、1850年のパレスチナへの旅と、それに触発されたパレスチナ地方の史実に対する興味、子供時代から何回も目にしていた、ルーアン大聖堂の北西面にある欄間彫刻（洗礼者ヨハネの斬首とサロメの踊りが刻まれている十三世紀初期の作）の記憶とにうながされて、『三つの物語』の中の「エロディヤス」を書いた。ここでは、二つの福音書に語られたヘロディアスを中心となる。舞いを舞う娘も、サロメの名を与えられて登場し、蝶や波、滝、嵐、花、甲虫など、アール・ヌーヴォーの線の動きを連想させる魅惑的な舞いで、ヨハネの首を褒美として見事に手にする。ここでサロメは、「若き日のヘロディヤ」として登場し、へ

ロディヤとサロメの、分身あるいは共犯者としての性格がうかがわれる。フローベール以後、サロメ像が母親を凌駕して、吸血鬼じみた、淫蕩な女性となってモローやワイルドの作品へ登場することになる。

ヘロディヤが、最初の夫の許を離れ、夫の異母兄弟ヘロデ・アンティパスと再婚したのは、平凡な夫に飽き足らず、より強大な権力をもつヘロデ・アンティパスによって、華やかな生活を望んだためという。⁽¹⁷⁾ ヘロディヤは驕慢で見栄っばりな性格だったといわれ、後年、自分の兄が王の称号を得たのをねたみ、夫のヘロデをけしかけたが、その策略は失敗し、ヘロデは領地も財産も没収されて流刑の身となった。その夫と、ヘロディヤはいさぎよく運命を共にした。⁽¹⁸⁾ マルコ福音書の中では、ためらう夫ヘロデ王より、果敢に冷酷に、自分たちの結婚を非難する洗礼者ヨハネの命を、娘を利用して奪う。そして、後の世は、ヘロディヤを聖なる預言者殺しの悪女として記憶することになった。

ヘロデ・アンティパスとヘロディヤの不法の結婚に対して、フローベールの洗礼者ヨハネは、ヘロデをまず非難する。

「われは熊のごとく、野の驢馬のごとく、子をうまんとする婦のごとく叫ばん！」

「天罰はすでに汝が兄弟の妻を娶りたるにあり。神は汝を驢馬のごとく子なくして苦しめ給うなり！」
(フローベール「エロディヤス」)

ヘロディヤに対する非難は一層厳しく、激しい。

「バビロンの女よ、くだりて塵のなかにすわれ！ 麴すりうをとりて粉をひけ！ 紳おびをときすて、鞋くつをぬぎ、髓すねをあらわして、河をわたれ！ 汝の肌はあらわれ、汝の恥はみゆべし！ 痛哭なげきは汝の齒を折らん！ 神は汝の罪あしきにおいの臭穢を憎みたもう！ 悪魔！ 悪魔よ！ 狗のごとくに死ね！」
(フローベール「エロディヤス」)

「汝は鞋の音をもて君の心を執とらえたるなり。汝は牝馬のごとくに嘶いなけり。汝は山の上に寐ねどをもうけ、汝の生鬢を祀りたるなり！」

「主が汝が耳飾りあかごろもをとり、緋衣うすぎぬ、薄絹かおおいの面帕うでわを、手釧あしわ、足釧あしわ、額あしわに垂れたる細かなる黄金の半月飾つきぶたかざり、白銀しろがねの鏡はねおおぎ、駝鳥の羽扇はねおおぎ、踵高き螺鈿おごりの鞋かおり、金剛石おごりの驕奢かおり、頭髪かおりの香氣いし、爪いろどり彩色いろどり、すべて汝たわたが淫楽よそおいの粉飾よそおいを取り除きたまわん。しかもこの姦淫の婦を撃たんに石礫いしも足らざるべし！」
(フローベール「エロディヤス」)

ワイルドの「サロメ」になると、その傾向が一層顕著になる。ヘロデ王への非難より、ヘロディヤに対する非難、痛罵は激しく、またヘロディヤの娘たるサロメも「バビロンの娘」「ソドムの娘」と糾弾される。

ヨカナーン

その男はどこにゐる、手に瀆神^{とくしん}の罪に満ちた盃を持てる男は？ どこにゐるのだ、銀糸の衣をまとひ、いつの日にか、衆人環視のなかに死に目をさらす男は？ その男に、こゝへ来て聴けと言へ、荒野に宮殿に叫びつゞける者の聲を聴けと。

ヨカナーン

その女はどこにゐる、腰に飾り帯をつけ、頭に色とりどりの冠をかぶれるアシリアの隊長どもに身を委ねし女は？ ……行きて、その女を穢^{けが}れし不倫の臥所^{ふしど}より起こし、主の道を掃き清める者の言葉を聴けと言へ、その罪を悔い改めよと。悔ゆる心なく、なほ醜き所業に耽らうとも、構ひはせぬ、こゝに來いと言へ、裁きの杖はいま主の御手にあるのだ。

ヨカナーン

退れ！ バビロンの娘！ 主に選ばれし者に近づいてはならぬ。お前の母は、その罪業の酒をもつて地を浸したのだ、その悪名は神の耳にも届いてゐる。

ヨカナーン

呪ひあれ、近親相姦の母より生まれし娘、お前のうへに呪ひを！

ヨカナーン

あゝ！ 淫婦！ 春をひさぐもの！ ……人をしてその女のもとに集らしめよ。かくして、おのおの石を手にし、女に向ひて投げつけしめよ……

この「おのおの石をもって集まり、その女に投げよ」というのは、「姦淫してはならない」（モーゼの十戒、出エジプト記二十章 14）「人の妻を姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者は姦淫した男も女も共に必ず死刑に処せられる」（レビ記二十章 10）から由来しているものである。配偶者がありながら、別の相手と結婚したヘロデもヘロディヤも、姦淫の罪を犯しており、近親相姦の罪にもふれている。その点では、ヘロデ、ヘロディヤも同罪であるが、何故、ヘロディヤのほうが手ひどく非難されているのであろうか。

前章で、サロメという名が、ヘブライ語で平和を意味する「シャローム」から来ていることにふれた。シャロームの意味する平和は、単に、戦争のない状態ではない。⁽¹⁹⁾ ヘブライ語の「シャローム」は、神と人間とが、契約関係を結び、その契約関係の具体的条件である律法を定め、それを忠実に遵守することにより、神の前に人間が自由で平和に交わることができる。そのような神の愛の支配による平和をさしている。その契約関係が完全な状態で維持されている状態が「シャローム」、平和なのである。

それならば、ヘロディアやサロメが生きていた時代の律法はどのような状態であったか。律法は、神と人との関係を正しく保つための規範であり、生活全般に強大な規制力をもつものとして存在していた。律法には、大別して、祭儀に関するもの、道徳的律法、社会共同体に関するものがあつた。結婚・離婚・再婚に関わるのは、道徳と社会共同体に関する律法である。祭儀に関しては、女性は神殿内に入ることすら許されていなかった。

当時、日常生活の領域では女性の活躍する場所は勿論あつたが、律法上からは、女性は未成年者や奴隷と同等に扱われて、社会的人格としては認められていなかった。古代のユダヤ教会の祈りの文句に、「祝福あれ、おお主なる神よ、全世界の王よ、私を女に創りたまわなかつた方よ」とあり、よく引用される、次のような有力なラビの言葉がある。「ほむべきかな、私を異邦人として作り給わなかつた方は。ほむべきかな、私を女として作り給わなかつた方は。なぜなら、女は律法に対する義務を負わされていないがゆえに」。男性が女性の性的・生殖的機能を法的に所有する場合はいつでも、その機能は、男性の所有物として扱われた。だから女性の性機能は自分のものではなく、それを所有する男性のものであつた。

ヘロディアスが、野心と支配欲に満ち、高慢な性格であつたことは事実であつたろうが、ヘロディアとしては、自分ばかりが、夫のヘロデよりも、手ひどく糾弾される状況に我慢がならなかつた。ヘロディアには、ヘロディアの言い分がある。彼女の言い分にも耳を傾けてみよう。

《私にも是非弁明の機会を与えて下さい。どうして私ばかりが、稀代の、預言者殺しの悪女という烙印を捺されるのでしょうか。そもそも、律法に背く結婚で非難されるなら、それはまず夫のアンティパスが受けるべきものでしょう。律法に、男にむかつて「兄弟の妻をめとる者は汚らわしいことをし……」と書いてありますもの。しかも、夫が子を残さずに死んだ場合は、その寡婦たるもの、家名の存続のために、夫の兄弟と結婚すべし、なんて笑わせませわね。⁽²⁰⁾ そもそも私の最初の結婚にしても、家長である男同士の契約で決められて、私の意志は何も問われなかつた。あの結婚そのものが政略結婚みたいなもので、しかも近親婚でした。だから、私は、アンティパスがローマにやってきて、私に関心を示して結婚を申し入れた時、律法への挑戦⁽²¹⁾を果たす好機だと、存命中の夫と別れて、アンティパスと一緒に彼の領地へやってきました。私にはヘロデ一族の血が流れています。野心もあり、冒険欲もあります。でも女にはそれを実現するチャンスは何もなかつた。だから学級肌の先夫より、アンティパスのほうが魅力がありました。

洗礼者ヨハネの糾弾は、アンティパスにもこたえていたらしい。律法の当事者なのだから心の中では、自分たちの結婚の不法性を良く承知していたし、良心の痛みを覚えていました。だからなかなか自分で手を下せないでいたのです。私は彼の優柔不断をよく知っていたから、娘の踊りの褒美を相談されたとき、ヨハネの首を今すぐ大皿にのせて、と娘に頼ませたのです。煮えきらないくせに、見栄っぱりのアンティパスに「否」といわせない好機だと思つたのです。つらかつたらしいけれど、彼は権力者ですから断を下した。あの状況だったら、や

むを得ず斬首したがそれは妻の差し金だったと言い抜けられる。心の底では安堵もしていたのですよ。ほんとうは、ヨハネに対する民衆のすごい人気に、嫉妬も感じ、不安も覚えていたのです。でも、ヨハネ処刑を断行する勇気はあの人にはなかった。だから、娘の申し出は勿怪の幸いでした。私と娘は、お蔭で女性の邪悪と残忍の象徴のように後の世に語り継がれてしまったのと同じ論法ですよ。⁽²²⁾ また私がアンティパスの、娘への色目にやきもちを焼いていたなんて、とんでもないこと。大体、女のやきもちなんて殿方のすさまじい嫉妬心にくらべれば、他愛のないものです。娘はほんの小娘で、私の言いつけにほんとに率直に従いましたもの。

あの当時の女性は、公的な世界では何の力ももてなかった。ポンシオ・ピラトの奥さんだって、イエス裁判の場で、「あの正しい人には関わらないで下さい」と、イエスを救おうとしたけれど、何の効果もなかったでしょう。あれがいい例です。⁽²³⁾ ついでに言わせていただければ、こじつけのようですが、例のエデンの園での「禁断の実」だって、蛇にそそのかされて女が食べた、虚栄に満ち、誘惑されやすい女のために、男は迷惑をこうむったみたいに言われていますね。⁽²⁴⁾ でもよく読んでごらん下さい。⁽²⁵⁾ 男はそれをいさめもせず、女にすすめられるままに食べて、あとで神様に詰問された時、あなたが一緒にしてくれた女がすすめたから食べた、なんて答えているでしょう。二重の責任転嫁だと思いませんか。

ナザレのイエスという方は、不当に差別されていた人々を公平に顧みて、手をさしのべられたようですが、「姦淫の女」の話はね、どうしたって、同性として異議申し立てをしたくなりますよ。言い始めれば際限なく異議がありますから、今はこのくらいで。》

聖書時代の女性の地位を考える時に、当時の社会的背景を考えないで、今日の基準でのみ云々するのは無論愚かなことである。今日、女性神学といわれる立場の人々が、女性の観点から聖書をもう一度読み直して、従来解釈に疑義を呈し、解釈し直そうとしている。⁽²⁶⁾ これは意味ある作業である。聖書は、抽象的な真理を語っているのではなく、ある具体的な状況（時代・場所・人々）から生まれてきたものであり、しかも、それを書いた人、資料を選別し判断を与えた人々は、みな男性であったことを、あらためて想起すれば、ヘロデよりはヘロディヤが預言者殺しと非難される背景に、やはり、女性蔑視の思想、女性を男性の従属的な存在と規定してきた律法があると思わずにはいられない。

ヘロディヤが不当だと主張していた新約聖書のヨハネ福音書の、「姦淫の女」をみてみよう。

ヨハネによる福音書七章 (53)、八章 1-11

〔人々はおのおの家へ帰って行った。〕

イエスはオリーブ山へ行かれた。朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。そこへ、律法学者やファリ

サイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか、だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。』

この部分は全体が〔 〕に入っていて、後の時代にヨハネ福音書に加えられたのではないかといわれている。教会の中で、非常に好まれていた話であつたらしい。この話は、イエスが「裁かず、許す人」であり、彼女に再生の機会を与えたことを示すものとして、今日でも好まれている。この女性の名は知られていないが、姦淫の現場で捕らえられて、イエスの前に連れてこられた。ファリサイ派の人々や律法学者たちは、イエスをおとし入れようとして、この女を引き連れてきたのであつて、姦通の場で捕らえられた女の気持や立場にはまったく関心がない。許せというか、罰せよというか。イエスの答にのみ関心をもっている。もし、イエスがモーセの律法に従うこと―石打の刑―を命じたなら、イエスの説いている愛の教えと矛盾する。また、律法に従わないでいいというなら律法破りとしてイエスを非難できる。それに対するイエスの答えは、一見見事である。「罪を犯したことの無い者から石を投げなさい」は、イエスの寛容さと慈しみ深さを余すところなく語っているとも思える。

けれども、姦通の現場で捕らえられたのが、何故女性だけなのだろう。現場なのだから必ずや姦通の相手である男性がいたはずである。彼はどこへ行ったのか。彼は糾弾されないでよいのか。「石で打ち殺せ」と、モーセが律法で命じているというのは、「男が人妻と寝ているところを見つけられたならば、女と寝た男も、その女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない」(申命記二十二章 22)「人の妻と姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者は、姦淫した男も女も共に必ず死刑に処せられる」(レビ記二十章 10)をさしている。それならば、姦淫の男も、ともに律法が規定した通りにこの場に連れてこられるべきであつた。また社会的弱者であり夫の所有物であつた女性が姦淫を犯すに至つたのは、余程の窮境にあつたと想像される。「罪をもう犯さないように」とイエスがさすだけでは、彼女の個人的な性質がこの不品行を生んだとみている証拠にも思える。女性からみると、何とも片手落ちの裁きだと思えるのである。

イエスは地面に何を書いていたのだろうか。聖書は何も語らない。きっとイエスは、女を非難する律法学者やファリサイ派の人たちの罪を列挙していたのだろうか、という見方もある。あるいはイエスは、告発されるべき相手の男性の名を書いていたのかもしれない。しかし男性の名は、明かされないままである。律法が、神と人との間で完全に守られている状態が、「シャローム」=サロメの名の由来である。しかし、その律法そのものが不完全なもの、女性に対して不当なものであれば、サロメ（=シャローム）の心は、平和ではいられない。

Ⅳーサロメとユディット——詩は絵のごとく

口絵1および口絵2は、ともにオーストリアの世紀末を代表する画家グスタフ・クリムト(1862-1918)の作品である。二人の顔立ちが違うのは、恐らくモデルになった女性の顔の違いからくるものでもあろう。口絵1は1901年作「ユディットとホロフェルネスⅠ」。しかし人々は、この絵を「サロメ」とよびならわしていたそうだ。当時のカタログの中では「サロメ」と題されていた。口絵2は1909年の作。「ユディットⅡあるいはサロメ」とよばれている。若い女性と男の斬られた首という取り合わせで、サロメとユディットが混同されたことは先述したとうりである。

ワイルドの『サロメ』がイギリスで上演を許されず、フランスでまず上演されたのが1896年。マックス・ラインハルト演出によってベルリンで上演されたのが1901年。リヒャルト・シュトラウスがオペラ「サロメ」を作曲し、1905年、ドレスデンで初めて上演された。二十世紀に入っていたとはいえ、モローやユイスマンス、ワイルドやピアズレーの好んだ、妖婦としてのサロメを生んだ十九世紀末の空気を、ウィーンのクリムトも親しいものを感じていたであろう。だが、何故、二つの絵がまず「ユディット」と名付けられ、それが別名サロメとよばれているのだろうか。口絵1・2も、ともに女が手に男の首をつかんでいるが、サロメのように、盆にのせた首ではない。クリムトは、まず、敵将ホロフェルネスの首をつかむユディットを描こうとしたのであろう。

図-Ⅳは、ルネッサンス時代の画家ボッティチェルリの「ユディットの帰還」で、1492年か93年の作とされる。⁽²⁷⁾ 侍女と二人でアッシリアの敵の陣地に入り込み、敵の大將ホロフェルネスの寝首を、敵の刀で斬り落として、衣の裾をなびかせて、同胞の待つ町ベトリヤへ急ぎ帰って行くところである。崇高な使命感と、大事を成し遂げた安堵とが彼女のひきしまった表情によみとれる。

同じユディットという女性が題材でありながら、クリムトとボッティチェルリとは、何と異ったとらえ方をしていることであろう。装飾的な金の首輪をした「ユディット（とホロフェルネス）Ⅰ」のユディットは、胸をあらわにし、腹のあたりに、男の首をつかみ、唇をなにかば開き、片目を軽くつむり、妖艶な、うすら笑いをうかべている。その笑いは、不敵な挑発か、嗜虐的な満足か、あるいは官能の陶醉か。いずれにしても、崇高な使命感に燃え立つ



図-IV ボッティチェリ「ユディットの帰還」(ウフィツィ美術館 フィレンツェ)
中央公論社 カンヴァス 世界の大家4 ボッティチェリより転載

救国の聖女という趣ではない。「ユディットII」は、髪形や衣装、化粧も当時のウィーンの上流市民階級の女性としての風俗だが、首をつかんでいる指の緊張と、何かを見据えている緊迫した面持ちの横顔からは、狂気に通ずる何か激しい情念が伝わってくる。

ユディットとは、ユダヤの娘という意味で、旧約聖書の「ユディット書」のヒロイン、女手一つで、敵将の首を斬り落として、ユダヤ民族の危機を救った英雄的な女性の名である。「ユディット書」は、第二正典とか外典とかよばれているもので、従来の日本聖書協会発行の『旧新約聖書』には入っていないが、カトリック、プロテスタント双方の学者が協力して完成した『新共同訳聖書』(1987)の「旧約続編つき」には収められている。

時は、ネブカドネザル王が周辺の民への侵略と殺戮とを恣にしていた頃である。ただし、この書は歴史書ではないので、歴史的背景は、全然、事実には即していない。文学性と教訓とを加味して、永久に忘れることのできない民族の記念すべき出来事、代々語り伝えられるべき物語として書かれたものである。中心を貫くのは、ユダヤ民族の強烈な選民思想と、唯一神ヤーヴェに対する固い信仰である。神との契約に忠実であり、契約のあかしである律法を守っている限り、神は必ずや、偶像崇拜に陥る異教徒を滅ぼし、ユダヤの民に勝利をもたらされるという信念である。

他の民とは違って、あくまで屈服を拒むユダヤの民を攻撃する敵の総司令官はホロフェルネス。彼はユダヤ人の町ベトリヤの水源を絶ち、陥落させようとする。渇きに苦しむベトリヤの人々は、渇きで死ぬよりも、ただちに降服して、捕虜となることを望む。五日のうちに神が助けなければ、降服して町を明け渡そうと決めた長老たちに、ユディットは、神を試す

傲慢をいましめて、自分には秘密の計画がある、必ずやそれを敢行すると告げる。

ユディットの夫マナセは数年前に亡くなり、まだうら若くて寡婦となったユディットは、美しく、賢明でかつ敬虔で、常に祈りと断食とに日を送っていた。彼女は寡婦とはいえ、夫の残した金銀、召使、家と土地とをもち、その全財産を侍女に管理させていた。

敵地に赴くユディットは、身に晴れ着をまとい、きらびやかな装身具をつけ、美しく化粧して、民を裏切り敵に寝返ったと見せかけてホロフェルネスに取り入り、色香に迷った彼の油断を見すまして、その寝首をかく。彼女は辱めを受けることなく、見事に撃ち取った敵将の首を侍女にかつがせて、ベトリヤへ帰還する。民はこぞって彼女の勲功を讃え、彼女も神への感謝をうたう。

男の首を斬ったとはいえ、ユディットは、決して猛々しい烈女ではない。主役は神であって、神が偉大なことを、か弱い者を通して成し給うその器として、ユディットは選ばれている。彼女が武器を一切もたず、相手の剣でその首を斬り落としたことにも深い意味がこめられている。ダビデが、まだ若い頃、石投げ紐と小石だけでペリシテ人の巨人ゴリアテを打ち倒し、その敵の剣を取り、それで首を斬り落としたことを思い出させる。ボッティチェルリの描いたユディットは、そういう女性である。

クリムトのユディットは、IにしてもIIにしても、どう見ても「ユディット書」の描く聖なる英雄ではない。人々がサロメとよんだのも、そこに官能と狂気、血のしたたるヨカーナの首に接吻するサロメと同質の匂いをかぎとったからではないだろうか。ユディットの話は、悪の力に対する信仰の勝利として、中世以来、詩や宗教劇の題材となった。音楽にもなっている。画家にはとりわけ興味のある題材で、ボッティチェルリのほか、ドナテルロ、マンテーニャ、カラヴォッジオ、ミケランジェロ、クラナッハなど多くの画家によって描かれている。フロイト以降にはこの物語に、精神分析的な解釈や解説もされている。

1840年に、ベルリンの王立劇場で上演され、異常なセンセーションを捲き起した五幕の悲劇「ユディット」は、ドイツの劇作家フリードリヒ・ヘッベル（1813-63）27歳の処女作である。その当時は、旧約聖書中の人物を戯曲化した「ザウル」が評判となり、ハイネが、ヴェルネという画家の描いたユディットの絵について書いた文章を目にしたヘッベルは、旧約聖書に題材をとって作品を書きたい意欲をかきたてられていた。尊敬するシラーが「オルレアンの乙女」（1801）で、祖国愛と敵将への愛の相克というテーマを手がけたことに強く刺戟されたこともあったらしい。

ヘッベルの「ユディット」は、旧約の「ユディット書」に基づいているが、ユディットとホロフェルネスの性格、ユディットの行為の動機は、原典とはまったく異なっている。このユディットは、夫マナセとの結婚生活で、処女のままであった。敵将ホロフェルネスは暴君ではあるが、説教もできるし、宗教について思いめぐらす一面ももっている。彼の前に出た時、彼女は「この人こそ男子だ」と思い、殺さなければならない相手に深く魅せられてしまう。その後で、侍女にむかって叫ぶ。「一人の処女にとって、それが処女ではなくなる刹那

ほど大事な刹那はない。そしてその処女が抑えていた血の沸きたちも、それが殺していた溜め息も、みんなその刹那に捧げねばならぬ犠牲の値打を高める」のだ。そして彼女は、自分を辱めた男を生かしておけぬと、剣を振りあげる。このドラマの終幕で、彼女の功績をたたえ「ユーディット万歳」と叫ぶ群衆の声をききながら、ユーディットは、「わたしは報いを所望いたします!」「わたしを殺して下さい!」と頼む。「わたしはホロフェルネスの息子を生またくない。わたしが^{うまずめ}石女になるように、神に祈ってお呉れ! 多分神はわたしに恵みを掛けて下されるであろう!」というのが彼女の最後の言葉である。

クリムトが、ヘッベルの「ユーディット」を読んだか、観たか、それを裏付ける資料を私は何ももたない。しかし、「ユディット I」の唇をなかば開いた表情は、「わたしの脳髄はとろとろと解けて煙のようになる」という呻きにも似たユディットのせりふを思い出させる。「ユディット II」の緊迫した横向きのユディットは、「わたしはたゞたゞ狂乱が望ましい。」「今わたしの心を苦しめていることは、永久にわたしを苦しめよう」の図像化だ。

サロメとユディットは、同じように聖書に材をとり、「うら若い女性と男の首」というモチーフを共通にもち、二千年を経て、世紀末的な陰影をもった女性像へと変容していく点も、軌を一にしている。

V-「サロメの乳母の話」をめぐる——「強きものよ、汝の名は女なり」

バロック・リアリズムの画家に属するイタリアの女流画家アルテミジア・ジェンティレスキ (1593-1652) は、繰り返しユディットを描き、ユディットに自画像をみた画家と評せられる。⁽²⁸⁾ 個性をもった女性の芸術家がはじめて西洋美術史に登場したのは、十六世紀であったといわれるが、カラヴァッジョの影響を受けた父に才能を見込まれ、技術を仕込まれたアルテミジアは、近年、大規模な回想展が開催され、アメリカで初の研究書が出版されるなど、再評価されている。1997年のフランス・イタリア合作映画『アルテミシア』(美術学校出身の若き女流監督アニエス・メルレの作品)も、日本の小劇場(パルテノン多摩小ホール)で上映された。

彼女は、妻を殺害した画家アゴスティーノ・タッシに弟子入りし、共同制作者となったが、父親が「娘が彼にレイプされた」と法廷に訴えた。レイプ裁判の屈辱を経て、拷問され、タッシと引き裂かれて、裁判ではその絵も余りに官能的にすぎると批判された彼女は、やがて、すべてを捨ててひたすら絵画に没頭した。バテシバ、ルクレツィア、クレオパトラなど、彼女が描いたのは、強靱な、自立した女性であった。恐らくは、女ながらに、民族を救った英雄ダビデにも比すべきユディットを、アルテミジアは一つの理想像とみていたのではないか。⁽²⁹⁾

塩野七生の『サロメの乳母の話』(1983)でも、サロメが踊りの褒美として、ヨハネの首を求める目的は、優柔不断な王が、しようとしてもできないこと——ユダヤ中が騒然としている中でその原因であるヨハネを殺すこと——を、舞の褒美という形で成し遂げようとしたか

らであり、サロメは見事にユダヤに平和をもたらした、恐れを知らぬ女勇士として描かれている。

『サロメの乳母の話』は短い作品だが、女性の歴史家の冷静な眼からサロメ像を見すえて、斬新な解釈を与えている。この話の語り手は、ひとりのエジプト人乳母である。ローマにおける先夫との結婚生活でヘロディヤが身籠ったときに、生まれてくる子のためにとヘロディヤ自身が雇った乳母である。彼女は、クレオパトラ宮廷の官女とローマ騎士の間に生まれたという出自を誇りとし、確固たる信念をもって、サロメを育て上げる。ヘロディヤはといえば、自分に娘がいることさえも忘れていたような、全身が女としての生き方にひたっている型の女性、と乳母は語る。それほど子育てには無関心な実母と義父のもとで、美しく利発に成長する幼児サロメに、乳母は控え目な愛情をそそぎ、ローマ人風の養育を施したのであろう。当然、作者は、聖書の記述をはじめとしてヨセフスの『古代誌』や『ユダヤ戦記』、「死海文書」などの史料に綿密に当たったうえで、乳母の目を通して、王統の女性たちが避けられない政治的な立場を、現実的に理解しようとしている。

この乳母ならば、サロメが話の舞台に登場してくる15歳まで、王女としての養育にも並々ならない情熱をもってあたっていたらと思うられる。属州ユダヤの分封国家を領するヘロデ王の不安定な権力の基盤を幼いながら身をもって知り、自分のみの判断を信じて生きる処世術を冷静に身につけたサロメ姫を、乳母はじっと見守っている。寡黙な15歳のサロメ姫は、王と実母を公然と律法に背く者と批判している預言者ヨハネが逮捕され、王宮に連行されてきたとき、その姿を見て興味を示す。父母や側近、乳母にさえまったく内心を明かそうとしない少女は、何かを決意して牢にいるヨハネの説教に耳を傾けるようになる。ヨハネは彼女が自分の教えに熱心に耳を傾け、反問しない様子にすっかり自信をつけ、王女を説得できるのではないかと、改宗さえも可能ではないかと思いはじめる。サロメの気質を知らないヨハネは得々と説教をつづけるのだが、ある時、サロメは次のように乳母に言うのである。

「善意に満ちていて、しかも行いの清らかな人が、過激な世改めを考え説くほど危険なことはないと思うけれど、乳母はどう思う？」

考えてみれば、小賢しいほどの政治感覚である。当時のユダヤは、反ローマ勢力、反ヘロデ王統勢力が、ユダヤ社会の宗教会派と結んで武力蜂起しており、ヘロデ王がヘロディヤと結婚するために離婚した前王妃の父、アラビア人アレタスが復讐のための挑発を行っていた。ヘロディヤの先夫であるヘロデの兄の系統に仕える党派も、分封国家同士で牽制し合っていたし、一方では各地で、洗礼者ヨハネに共鳴するメシア運動とユダヤ国粋民族主義が奮い立っていた。ローマの庇護を得ながら巧妙に統治してきたヘロデにとって、洗礼者ヨハネは、民衆蜂起の抑止のための切り札にもなる存在と最初は考えたのだろうが、ますます強力になるヨハネ派の勢いに怯えるようになっていた。それに新任の総督ポンシオ・ピラトは、属州からの財源確保という任務以外には、辺境の政治的事情や、死海のほとりにあらわれた預言者とその不穏な運動などについては、大した関心がなく、むしろ、ヘロデ一族内部の覇権

抗争に注意を払っていたような感がある。

ヘロデの宴会は、そうした複雑な政治的、経済的、宗教的情勢の盛り上がりのなかで、ティベリウス皇帝の臣下の一行を迎え、ヘロデ王最大の政治的パフォーマンスの場としておこなわれる。そのことをサロメは敏感に感じ取っている。宴の美食や感興に飽き飽きしているローマ使節の関心事は、不思議な魅力を発している王妃ヘロディヤの娘サロメの妖しい美しさだけである。窮地を好機に転ずるため、ヘロデが計画したのは、王の威光さえかなぐりすてて、妻の美しい連れ子サロメに踊りを所望することであった。分封国王が国の半分を褒美にくれてやろう、と約束するのだが、その領地約束の根拠など、本当は無に等しい。サロメの美貌と踊りの魔力がローマを喜ばすのなら、きわめて基盤の脆弱な自分の政権もしばらくは安定するかもしれないとヘロデは考えたのであろう。おそらくサロメは、ヘロデの願いもヘロディヤの思いも、ローマ側の策略もすべてを承知したうえで、七枚の薄絹のヴェールの踊りを踊り、ユダヤに平和を実現するためにヨハネの生首を要求したのだった。サロメが熟慮の末、最良と信じて出した結論であったろう、と作者は考える。

後に彼女は乳母に言う。「イエスは、ユダヤの王もローマの皇帝も、攻撃してはいない。カエサルのはカエサルに、神のものは神に、と言っているそうよ。イエスはヨハネを越えている。やはり、ヨハネは、彼自身が言ったように、後からくる人のはきものを持つ値打ちもなかったのかもしれないわね。可哀そうな人だこと」

塩野の描くサロメは、ジャンヌ・ダルクのような救国の烈女のイメージとは反対に、冷酷なほどユダヤとユダヤ人を見捨ててしまう。巡察団の一行にいたローマの青年貴族の妻となって、ローマ郊外のティヴォリに住む。激動の時代が訪れようとも、彼女は、冷徹に自己の現実と将来を見据え、運命に翻弄されるのではなく、意志的に、運命を切り拓いていく。現実、女性が表向きの政治史に登場するまでの二千年の隔たりに、じっとサロメは目を凝らし、時の推移と自立していく女性の運命を見定めているように思われる。

塩野七生は『世紀末の美と夢』（辻邦生編集 全6巻）の各巻の巻頭の辻邦生との対談で、女性の立場から含蓄のある発言をしている。

「常に女の方が、蛮勇と言ってもよいけれど勇気があるのではないのでしょうか。……それに、その勇気という面で言えば、常に女の方がラディカルであったのではないのでしょうか。だってキリストを最初に認め、死んだときでさえ逃げようとしなかったのは女たちでしょう。そんなことを考えると、世紀末（つまり）十九世紀末は、男たちがまず自分たちの活力の衰えを鋭敏に感じて、もはや自分たちの能力では如何ともしがたいと感じ、そこから脱け出る何かを女に求めたのではないのでしょうか。……」⁽³⁰⁾

総合講座の教室では、リヒャルト・シュトラウスの楽劇『サロメ』（コヴェントガーデン・ロイヤルオペラハウス管弦楽団）のビデオを110分かけて観賞することから授業を始めた。

サロメは、ワイルド原作、シュトラウスのオペラという形で最も広く知られているからである。ヨハネの首を包んだ白い布ににじんだ鮮血の生々しさと、「らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた」(マルコ一章)という禁欲者の風貌の、痩せた洗礼者ヨハネを演じるには、あまりに堂々たる体軀のプリン・ターフェル(ヨカーン役のバリトン歌手)に圧倒される感じがしたものだ。今、ここに音楽、絵画、文学、歴史、女性神学と、サロメの系譜をたどって、二千年前の聖書の世界から現代のSFまで、いくつもの分野を渡り歩き、各種の作品を涉猟するのは、なかなか手応えのある知の探険であった。

終りに、私達女性の生き方のモデルとして、サロメの話に何を学んだらよいだろうか。世のお嬢さん方、決して男の首を斬ってはいけません。サロメ=シャローム=平和の名にふさわしく平和をたっとんで生きましょう。旧約のユディットのように、崇高な使命のためとはいえ、嘘をつき、相手をだまし、容色と性的魅力を頼みとするのもフェアなことではありません。けれども、福音書のヘロディアの、権力者である夫の弱点を巧みに利用して、自分の欲するところをまんまと実現した手腕には、大いに見習うところがあります。イタリアに住んで、千年単位で歴史の興亡をみつめてきた塩野七生の描くサロメの、母からの全き自立、イエスと洗者ヨハネの真価の見定め方など、見事すぎるほどです。塩野の評価するサロメの冷徹な現実凝視、非情なまでの政治的センス、これは二十一世紀に生きる女性に是非身につけてもらいたいものです。天の半分を制する女性は、世界を変革する力をもっているのですから。

註

- (1) ワイルドのサロメは、1891年にフランス語で書かれ、フランスで刊行された。フランスの女優サラ・ベルナルがロンドンで上演する予定であったが、イギリスの演劇検閲官ロード・チェンバレンから上演禁止の命令を受けた。聖書中の人物を取り扱っているためであった。初演は1896年のパリである。ワイルドの同性愛の相手アルフレッド・ダグラス卿が1894年に英訳し、そのダグラス訳刊本にピアズレーの挿絵が添えられた。この挿絵が『サロメ』を有名にし、ワイルド自身もそれを認めていた。
- (2) 旧約聖書の外典。カトリックとギリシャ正教の聖書である「七十人訳」(紀元前三世紀の古代ギリシャ語訳)に含まれており、プロテスタントでは外典としているもの。
- (3) A Rebour J.K.ユイスマンス作「さかしま」。
- (4) ギュスターヴ・モロー(1826-1898)フランスの画家。神秘的、唯美主義的な画風で、終始、時流の外にあった。聖書や古代神話など、文学の主題を手がけ、幻想的な、華やかな色彩で描いた。
- (5) 「出現」Apparition。デ・ゼッサントは、十九世紀末の美学の生んだ典型的人物ともいえる青年。「聖者の斬り落された首は、敷石の床に置いた皿から浮きあがり……涙をしたたら

- せ、サロメをじっと見ている。」「…この首はサロメだけに見え……」（「さかしま」澁澤龍彦訳）。
- (6) ヨセフスの『ユダヤ古代誌』の第18巻は、有名な、ヨセフスのいわゆる「キリスト証言」を含んでいる。後代の加筆も含まれているといわれているが、ヨセフス自身は、「イエスに罪があった」とは考えていなかった。福音書への不可欠の手引き書としてキリスト教徒からは愛読された。
 - (7) ヨセフスは入手し得る限りのギリシャ語の資料を集め、ローマ側の資料も注意深く検討しているが、親ローマ、反ユダヤ国粹主義という彼の立場を考慮して読む必要がある。
 - (8) 本稿での聖書引用はすべて『新共同訳聖書－旧約続編つき』（日本聖書協会 1986）による。
 - (9) 「狐」は、狡猾という意味でもあるが、つまらない、価値のない、という意味ももつ。
 - (10) ルカによる福音書23章 6－12。
 - (11) フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』 XVIII18-V（『ユダヤ古代誌』XVIII 66頁 山本書店 1980）。
 - (12) 「ユダヤ古代誌」XVIII-V（『ユダヤ古代誌』XVIII 78頁 山本書店 1980）。
 - (13) ペレアのマケラオ（マカレオ）城は、死海の近くにあり、ガリラヤからは遠く離れていた。
 - (14) 「非常に心を痛めた」と同じ表現は、マルコ14章34でもう一度用いられており、それはイエスのゲッセマネの祈りの時であった。
 - (15) 「ユダヤ古代誌」XVIII-V（『ユダヤ古代誌』XVIII 70頁 山本書店 1980）。
 - (16) 「ユダヤ古代誌」XVIII-V（『ユダヤ古代誌』XVIII 78頁 山本書店 1980）。
 - (17) 山室民子『聖地に咲いた花 聖書の女性34人』156-159頁（日本基督教団出版局）。
 - (18) 「ユダヤ古代誌」XVIII-VII（『ユダヤ古代誌』XVIII 121-122頁 山本書店 1980）。
 - (19) 木田献一『平和の黙示－旧約聖書の平和思想－』2-3頁（新地書房 1991）。
 - (20) 申命記25章 5-8。
 - (21) フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』XVIII-V（『ユダヤ古代誌』78頁 山本書店 1980）。
 - (22) マタイによる福音書27章 24-26。
 - (23) マタイによる福音書27章 19-20。
 - (24) ジョン・ミルトン『失樂園』10巻 885-6行。女は「生まれつきひねくれた一本の^{あばらほね}肋骨」「それもどうやら不^{ひだりぎみ}気味に曲った肋骨」からつくられた、とある。
 - (25) 創世記3章 1-12。
 - (26) 絹川久子『女性の視点で聖書を読む』（日本基督教団出版局 1995）。
 - (27) ボッティチェリはこの他にも、「ホロフェルネスの遺骸の発見」など、何枚か、この主題で描いている。
 - (28) アルテミジア・ジェンティレスキについて、塩川浩子氏（共立女子大学文芸学部教授）から御教示を受けた。厚く御礼を申し上げる。
 - (29) 若桑みどり『女性画家列伝』11-19頁（岩波新書 1985）。
 - (30) 『世紀末の美と夢』5 20頁（集英社 1986）。

■参考文献

- オスカー・ワイルド『サロメ』 福田恆存訳 (岩波文庫 1998)
- ハインリヒ・ハイネ『アッタ・トロル (夏の夜の夢)』 井上正蔵訳 (岩波文庫 1989)
- クリスティアン・フリードリヒ・ヘッベル『ユーディット』 吹田順助訳 (岩波文庫 1990)
- ギュスターヴ・フローベール『三つの物語』 山田九朗訳 (岩波文庫 1951)
- ステファン・マラルメ『マラルメ詩集』 鈴木信太郎訳 (岩波文庫 1966)
- ジョリ=カール・ユイスマンス『A Rebours さかしま』 澁澤龍彦訳 (桃源社 1973)
- 塩野七生『サロメの乳母の話』 (中公文庫 1986)
- 『新共同訳聖書-旧約続編つき』 (日本聖書協会 1987)
- 遠藤周作『聖書のなかの女性たち』 (講談社 1974)
- 山室民子『聖地に咲いた花-聖書の女性34人』 (日本基督教会出版局 1985)
- 石塚八重他『聖書に生きる女性たち-新約編』 (一粒社 1983)
- 澁川久子『聖書のなかの女性たち』 (玉川大学出版部 1997)
- 木田献一『平和の黙示-旧約聖書の平和思想-』 (新地書房 1991)
- The Women's Bible Commentary (女性たちの聖書注解) C.A.ニューサム/S.H.リンジ編 (新教出版社 1998)
- The Interpreter's Dictionary of The Bible, Abingdon 1962
- The Interpreter's Bible, Volume 7, Abingdon 1953
- 『新共同訳 新約聖書注解 I』 (日本基督教団出版局 1985)
- 『新共同訳 新約聖書注解 II』 (日本基督教団出版局 1985)
- 『新聖書注解 新約 1』 (いのちのことば社 1982)
- 山川鴻三『サロメ-永遠の妖女-』 新潮選書 (新潮社 1989)
- 井村君江『「サロメ」の変容』 <翻訳・舞台> (新書館 1990)
- 絹川久子『女性の視点で聖書を読む』 (日本基督教団出版局 1995)
- フラウィウス・ヨセフ『ユダヤ古代誌』 全二十巻 (山本書店 1980)
- 山本七平『禁忌の聖書学』 (新潮社 1992)
- 野阿梓『少年サロメ』 (講談社 1998)
- 河村錠一郎『世紀末の美学』 (研究社出版 1986)
- 辻邦生編『世紀末の美と夢』 <全 6 巻> (集英社 1986)
- 若桑みどり『女性画家烈伝』 (岩波新書 1985)
- マリオ・プラーツ『肉体と死と悪魔 (ロマンティック・アゴニー)』 (国書刊行会 1987)